

三菱養和 SC コーチ

富田将司さん



サッカーで味わった挫折と果実。

専修大学サッカー一部がリーグ4連覇を果たすなど圧倒的な強さを誇っていた時代のメンバーだった富田将司さん。現在は、かつて自身が所属した三菱養和 SC でコーチを務める。ずっとサッカーと向き合ったことで味わった喜び、楽しさ、悔しさ…それらを糧に、いま選手たちに向き合っている。

↑三菱養和 SC 巣鴨グラウンドにて

緑鮮やかなグラウンドで少年たちがボールを追う。その真剣な表情からは「上手になりたい」という思いが溢れる。その思いに応えるためにも「本気で向き合っている」とコーチの富田将司さん。

三菱養和 SC はいわゆる「街クラブ」の名門。Jリーグクラブの下部組織ではないながら、U-18 年代では日本クラブユース選手権で優勝3回、準優勝7回など輝かしい実績を残し、多くのプロ選手を輩出してきた。最近ではクラブ出身の相馬勇紀選手、中村敬斗選手などが日本代表でも活躍する。

富田さん自身は地元の小学校でサッカーを始め、

厳しいセレクションを経て中学から三菱養和 SC に入団。高校年代のユースチームでは高3のときにキャプテンを務めている。そして専修大学に進学。

専大でプロへの夢にぐっと近づく

「とんでもないチームに入ることになったぞ」

専修大学への推薦入学が決まって、しばらくして思ったという。入学の前年度、専修大学は関東大学リーグで優勝。さらにはインカレも制し日本一に。メンバーには後の日本代表、長澤和輝選手 (H26 経営卒)、仲川輝人選手 (H27 商卒) らが名を連ねていた。

とみた まさし

1993年東京都北区生まれ。三菱養和SC東武ジュニアユース、ユースでプレー。ポジションはセンターバック。2011年専修大学法学部入学、体育会サッカー部に所属。2015年卒業後、三菱養和SCのコーチに。趣味は料理、ドライブ、神社巡り、ダーツ。

三菱養和SC (サッカークラブ)

東京の巣鴨と調布にグラウンドがあり、幼児から小6までのサッカースクールを展開。選手コースとしてはジュニア(小4～)、ジュニアユース(中1～)、ユース(高1～)のチームがあり、各年代で実績を残す。



↑子供の頃から大学までポジションはセンターバック

そんなチームだったが、主力の怪我もあり、入学してすぐ出場機会を得る。ただ、当時のチームの雰囲気はすさまじいものがあったという。

「簡単なミスを繰り返したら、何やっているんだと、いい意味で厳しい檄が飛んできた。勝負にかける熱量、ミスできない緊張感はすごかったです」

そのような厳しさの中でもレギュラーとして出場を重ね、自信を得ていった。関東大学リーグ連覇を決めた早大との一戦。雨のフィールドでの勝利の瞬間は鮮烈な記憶として残るという。

Jリーグクラブと練習試合をすることも多く、夢だったプロへの距離は一気に縮まったように感じた。

夢の終わり、そして始まり

サッカー人生が暗転したのは大学2年。右膝半月板損傷の大怪我を負い、12月に手術。3年次はほとんどプレーできず、本格的な復帰は4年次からとなった。

「監督の恩情もあったのかもしれないですが、夏の総理大臣杯のメンバーに選んでいただきました。でも、初戦前日の練習で怪我が再発し、膝が試合をする負荷に耐えられないことが分かりました。自ら監督に出場の辞退を申し出て、そこで自分のサッカー選手としての人生を終えました」

就活をして、一般企業からの内定を得た。だけど、心に引っかかる。

「自分がスーツを着て働く姿が想像できなかった。内定を取り下げて、卒業後、もう一年かけて本当に納得できる仕事を探そうと決めました」

卒業が近づく12月、三菱養和SCの恩師から「コーチをやらないか」という誘いを受けた。怪我でプレーできないとき、学生コーチとしてチームをサポートしていた。その姿を見て、気にかけてくれていたのだ。

挫折の果実

「選手として、後悔がないわけではない。もっと真剣に怪我と向き合って、本気でリハビリに取り組ん



↑大学1年次の4月、関東大学リーグにて22番が富田さん

でいけば、復帰が早くなり、選手を諦めることはなかったかも…」

時を経て気づくことはある。経験から学んだことをコーチとして選手たちに伝えている。怪我をしないためにどうするか。怪我をしたときどうするか。そして、試合に出られないときに、どう頑張るか。「コーチとしては、試合に出られなかった経験もあってよかったと思っています。チームは試合に出る選手ばかりではなく、出られない選手も含めて成り立つ。出られないとき、そこからどう這い上がっていくか、それを寄り添って伝えられます」

大学時代、サッカー部での日々はかけがえのない財産だ。7時から生田キャンパスで練習が始まる。毎朝、4時に起き、4時45分に家を出た。それに合わせて、母がおにぎり作ってくれて——いまさらながら多くの人に支えられていたと実感する。

「練習はきつかった。でも、それを乗り越えないと試合に出られない。試合に出られなければプロにもなれない。壁、壁、壁があつて。目標に向けて、考えさせられて。コーチがモチベーションを与えてくれた」

一つ一つの経験がいま活きている。かつての自分に向き合うように、まっすぐに選手に向き合う。

「選手たちには限界を決めてほしくない。それを突破していくことでサッカーの技術を高め、人間としての器を大きくしていけると思っています」